

翻 訳

どんぐりを植えた人たち

——カリフォルニアの森の劇——

(1916年マクミラン社より出版)

J・ロンドン作
辻井榮滋訳&ノート

要 旨

世界が始まった頃のこと、レッド・クラウドの部族は小さな森で夜に向けて野営テントを張った。レッド・クラウドというのは、人類の最初の人間で、ニシナム族の最初の人間であり、^{いくさ}戦以外では、生きることの務めを歌い、その務めとは生きることをいっそう豊かにすることであった。シャーマン、すなわちまじない師は、凶事の前兆と予言を歌った。^{いくさがしら}戦頭は、戦で指揮を執り、戦こそが生きる唯一の道だと歌った。ところがレッド・クラウドはそのことを否定し、生きるべき道はどんぐりを植える者の道であり、1人の男を殺す者は誰であれ多くのどんぐりを植える者を殺すことだと断言する。レッド・クラウドは、まじない師とその一族に主張で打ち勝った。

それから数千年が経って、再び森にニシナム族が登場する。レッド・クラウド、^{いくさがしら}戦頭、まじない師、そして^{デュー・ウーマン}露の女の名のもとに、賢人、兵士、牧師、そして女性の類型といった永遠の人物像がくり返されて、人間の社会的珍事につねに登場してくるのである。レッド・クラウドは、難破した探検隊を耕作者や生命を育てる人たちと認め、そういう人たちを親切に扱うのを良しとする。ところが、戦頭と戦の考えが支配力をふるっている。まじない師は^{いくさ}戦派に組し、探検隊の大虐殺に内々関与する。100年が過ぎて、季節の移住で、ニシナム族は夜に森で野営する。彼らはまだ生きており、生きるための^{いくさ}戦の方式が、優勢な生命を育てる人たちである白人たちが迫りきているにもかかわらず、求められているようである。白人たちというのは、北や南や東や西から—イギリス人、アメリカ人、スペイン人、それにロシア人—で、どっとカリフォルニアへと入ってくるのである。白人たちによる大虐殺が続き、レッド・クラウドは死に際に、白人をどんぐりを植えた人たちの兄弟であり、自分がつねに主役であり続けた優勢な生命の方式の占有者だと認めている。納め^{エピログ}口上ないし大詰めでは、^{いくさ}戦の終わりとどんぐりを植えた人たちの勝利の祝賀となる。

序 幕

時。世界が始まった頃のこと。

舞台。大木が広い間隔をおいて立っている森の山腹。その山腹から吹き出す泉からは、小川が流れ出ている。そこは、青々としたシダや草むら、さらには、アメリカ杉の森林地帯にあるような低木の茂みの地でもある。左手の、山腹のふもとの広々とした平らな空間には、木々の間の見えない所に広がって、ニシナム・インディアンのキャンプの土地が見える。そこは、夜用の一時的なキャンプだ。小さな料理用の火がくすぶっている。あたりには、糧食や手荷物を運ぶための細枝を織って作った籠かごが散在している。槍や弓や矢筒も散乱している。少年たちが、薪用たきぎに枯れ枝を集めている。若い女性たちは、ヒョウタンに小川の水をいっぱい入れて、あれこれとキャンプの仕事にとりかかる。大勢の年輩の女性たちは、石うすにどんぐりを入れて、石の杵きねで突き砕いている。1人の老人とシャーマン、すなわちまじない師とが、期待しながら山腹を見上げる。みんなが鹿皮かかとの踵かかとのない靴をはき、衣服には獣皮をまとって、原始的である。武器や用具には、鉄も織物もまだ登場することがない。

まじない師

(丘の斜面を見上げながら。)

レッド・クラウドは遅いな。

老人

(丘の斜面によく目をやってから。)

彼は鹿を遠くまで追いかけていった。我慢強い男だ。追いかけるときには、老人みたいに我慢強いんだ。

まじまい師

彼の足は、鹿の足と同じぐらい速い。

老人

(うなずきながら。)

それに彼のほうが、鹿よりも辛抱強い。

まじない師

(教訓を教えこむかのよう、断定的に。)

彼は偉大な頭かしらだ。

老人

（うなずきながら。）

彼の父親も偉大な頭だった。彼は父親似なのだ。

まじない師

（さらに断定的に。）

彼は父親そのものだ。そういうことだ。父親の父親だ。最初の人間、最初のレッド・クラウド、一族の長の地位に生まれつき、何度もずっと生まれ変わってな。

老人

そういうことだな。

まじない師

彼の父親はコヨーテ（草原オオカミ）だった。母親は月だった。そして彼は、最初の人間だったのだ。

老人

（くり返しながら。）

彼の父親はコヨーテだった。母親は月だった。そして彼は、最初の人間だった。

まじない師

彼は最初のどんぐりを植えた、ひじょうに頭のいい男だ。

老人

（くり返しながら。）

彼は最初のどんぐりを植えた、ひじょうに頭のいい男だ。

（女性たちから叫び声が出て、顔の向きもいっせいに変わると、レッド・クラウドが丘の斜面を下りてきて猟師たちのあいだに現われる。みんなが槍と弓を持っている。兎うさぎを持っている者もいれば、小さな獲物を持っている者もいる。何人かは鹿を運んでいる。）

ニシナム族の嘆き

レッド・クラウド、肉をもたらす者よ！

レッド・クラウド、どんぐりを植えた者よ！

レッド・クラウド、ニシナム族最初の人よ！

汝の人々は腹をすかせている。

彼らははるかな旅をしてきた。
 道は険しかった。
 日がな1日探し求めた。
 山高く、
 池の中深く、
 草のあいだをあまねく、
 藪やぶの中や木のとっぺん、
 地下や平板な石の下まで。
 どんぐりはほとんどない、
 木の実の時は去り、
 魚や、車えびや、イナゴも消えうせた、
 草の種は遠くへ吹き飛ばされ、
 幼い鳥たちは遠くへ飛ばされ、
 木の根は古くなり、萎しおれている。
 肉を焼く火がおこされる。
 眠るための大枝が敷かれるも、
 なおも汝の人々は眠れない。
 レッド・クラウド、汝の人々は腹をすかせている。

レッド・クラウド

(それでもなお下くだりながら。)
 良き猟を！ 良き猟を！

猟師たち

良き猟を！ 良き猟を！

(下り終えると、レッド・クラウドは肉を運ぶ者たちに合図をする。彼らは女性たちの前に重い荷物を投げ落とすと、女性たちは飢えたように獲物を検分する。)

ニシナム族の肉の歌

口にするのにうまい肉、
 古い歯には柔らかく、
 若い歯には軟骨、
 大きな鹿と太った鹿、
 脂肪のない肉と太った肉、
 尻の肉と膝関節の骨、
 肝臓と心臓。

老人たちにとっての食べ物、
男たちみんなにとっての命、
女性たちと赤ん坊たちにとっても。
飢えの苦しみを和らげ、
悲しみを打ち消し、
喜びを請う、
その煙るにおいと
口の中の甘さに。

（若手の女性は肉を引き受け、年上の女性はどんぐりを突き砕くことをまた始める。）

（レッド・クラウドは、どんぐりを突き砕いている者たちに近づき、うれしそうに彼女たちを眺める。まじない師が目立つ所に立ち、みんなは彼のまわりに群がり、その行動のすべて、その言葉のすべてに耳を傾ける。）

レッド・クラウド

どんぐりの芯はうまいかい？

1 番めの老女

（うなずきながら。）

おいしい食べ物だ。

レッド・クラウド

おまえがにが味を突き砕き、ふるい捨て、洗い流せばな。

2 番めの老女

レッド・クラウド、おまえさんが教えてくれたように、世界がとても若くおまえさんが最初の人間になった時にね。

レッド・クラウド

油っこい食べ物だ。命を作るし、命というのはいいもんだ。

まじない師

以前の収穫の少ない時にニシナム族に命を与えてくれたのは、おまえさ、レッド・クラウドだ。あの頃、ニシナム族ではない種族たちは、朝の露みたいに死に絶えてしまった。

（彼は、うなずいて、老人に合図を送る。）

老人

昔、飢饉のとき、
 老人がまだ若い頃、
 天から雨が降らなくなった頃、
 大草原がひからびて、やせしぼんだ頃、
 魚たちが川からいなくなった頃、
 そして野生動物が病気で死んだ頃、
 どんぐりを知らなかった種族では、
 女たちはみんな乳が出なくなり、
 若い者たちはみんな鹿の皮をかみ、
 老人たちはみんなため息をついて死んでいった、
 そして若者たちはみんなその老人たちのそばで死んでいった、
 とうとうみんな種族とトーテム像もろとも死んでいった、
 そしてもういたる所に死の山だった。
 それでもニシナム族は負かされず、
 飢饉によって滅びはしなかった。
 おお、どんぐりをレッド・クラウドはみんなに与えた！
 おお、どんぐりをレッド・クラウドはみんなに教えた
 飢饉の時と難儀に備えて
 柳の籠かごに蓄える方法を！

まじない師

(は、老人の話の間じゅう、うなずいて同意の気持ちを示し、レッド・クラウドのほうを向く。)
 レッド・クラウドよ、汝の人々に歌えよ、生命の歌であるどんぐりの歌を。

レッド・クラウド

(歌い始める準備をして。)
 それに女の歌でもある、な、おお、まじない師よ。

まじない師

(しかつめらしく、人々を黙らせて聴かせようとしながら。)
 レッド・クラウドは、父親の口で、それから時と人間の始まりに至る父親のまた父親たちの口で歌う。

最初の人間の歌

レッド・クラウド

わしはレッド・クラウド、

ニシナム族の最初の人間だ。
わが父はコヨーテ。
わが母は月。
コヨーテは星々と踊り、
そうして、ある真夏の夜に月と結ばれた。

コヨーテはすごく賢い、
月はとても古い、
コヨーテの知恵がわしのもの、
月の年齢がわしのもの。
わしが最初の人間。
わしが生命を作り、生命の父親だ。

わしが火をもたらした。
ニシナム族は最初の人間たちだが、
彼らに火はなく、
寒さのひどい夜の激しい寒気を知っていた。
豹ひょうが東方から火を盗み、
キツネが豹から火を盗み、
ジリスがキツネから火を盗み、
そしてこのわしレッド・クラウドがジリスから火を盗んだ。
このわしレッド・クラウドが、ニシナム族のため火を盗み、
そして森の奥に火を隠した。
きょうまでその火は、その森の奥にある。

わしがどんぐりを植えたのだ。
わしが天からどんぐりをもたらしたのだ。
わしが短いどんぐりを谷間に植えたのだ。
わしが長いどんぐりを谷間に植えたのだ。
わしがあの芽を出した、あの芽を出した黒いオークのどんぐりを植えたのだ！

わしがショウ・カムと地面の根を全部植えたのだ、
わしがからす麦と大麦と、ビーバー尾っぽの草くるみを植えたのだ。
タール草やキンポウゲの草花、岩レタス、地レタスもな、
それから花の季節にはクローバーの効きめも、
黄色い花粉で玉のように丸くなった、黄色い力のあるクローバーも教えた。
わしが火で焼いた熱い石を使って籠の中で料理を教え、
地あぶりをして芳ばしい水で洗って、

とちの木の実とカスミソウをひとかじりして
 それからこけももの実を粉にして、
 熱い石を砂のたまりに入れて料理する方法と、
 それから鹿のこぶの形をした尾でその食べ方を教えたのさ。

さらにまた教えたのは、草や草の根を収穫したり蓄えたり、
 乾かしたり突き砕いたりすることを；
 それからまた教えたのはニシナム族の発祥野营地^{ホーム・キャンパス}での種植えだ、
 ニシナムの丘や谷間に、
 然るべき時と季節に、
 春の雨どきに芽を出し日なたで成熟するように。

まじない師

万歳、レッド・クラウド、最初の人間！

人々

万歳、レッド・クラウド、最初の人間！

まじない師

世界でわれらの歩む道を教えてくれた人！

人々

世界でわれらの歩む道を教えてくれた人！

まじない師

世界でわれらの食べ物の作り方を教えてくれた人！

人々

世界でわれらの食べ物の作り方を教えてくれた人！

まじない師

世界でわれらの心のありようを教えてくれた人！

人々

世界でわれらの心のありようを教えてくれた人！

まじない師

家族の習わしを与えてくれた人！

人々

家族の習わしを与えてくれた人！

まじない師

部族の掟を！

人々

部族の掟を！

まじない師

トーテムの掟を！

人々

トーテムの掟を！

まじない師

それから人間たちの中であってわれらを強くしてくれた！

人々

それから人間たちの中であってわれらを強くしてくれた！

レッド・クラウド

生きることはすばらしい、おーシャーマン、なのにわしはその歌をまだ半分しか歌っていない。どんぐりはすばらしい。女性もそうだ。生きることはすばらしい。愛情も同じようにすばらしい。けれどもこうしたものもすべて、女性がいなければ力がない。そしてこうしたものによって女性が強い男性を作り、強い男性が生きること、ずっともっと生きることを招くのだ。

いくさ がしら
戦 頭

（まじない師から話の腰を折る身ぶりがあるが、それをレッド・ウッドは認める。）

わしは美は気に入らん。敵を殺して食用獣肉を狩り立てられるように、わしは戦いでは力を追跡では速さを望む。

レッド・ウッド

おー、^{いくさがしら}戦頭よ、よく言った。寄りあいでのみんなの声でわしらは考えがわかっており、それもまた、力だ。それと、愛情もだ。愛情と力と美は1つだからな。高い青空を舞う鷺は美しい。日の明かりのもと白い水を跳ねる鮭も美しい。競走で一番足の速い若者も美しい。よく飛び、よく跳ね、よく走るから、美しいのだ。美によって美が生まれるにちがいない。巻

き尾の猫から巻き尾の猫が生じ、鳩だって同じだ。鳩から巻き尾の猫など絶対に生まれることはない。心は優しくないといけない。小さな亀は優しくない。だから、小さな亀なんだ。日差しの暖かい砂の中に卵を生んで、永久に子のことを忘れてしまう。だから、小さな亀は永久に小さな亀なんだ。だが、わしらは小さな亀ではない。優しいからだ。子を砂の日差しに置き去りになどしない。わしらの女たちが子を胸で暖め、のちには、鹿の皮や野営の焚き火で暖めてやる。わしらは優しいから人間なのであり、小さな亀ではないし、だから優しくないから強くない小さな亀を食べるわけだ。

いくさ がしら
戦 頭

(みんなに聞かれるように手まねで話す。)

モドク族は、その力でわしらに向かってくる。たびたびモドク族は、わしらに向かってくる。わしらは、モドク族には優しくなれない。

レッド・クラウド

そういうものは、あとで来ることだ。優しさは発達するものだ。まずは自分たちに優しくならないといけない。その後、ずっとあとで、すべての人間たちがすべての人間たちに優しくなり、すべての人間がひじょうに強くなるものだ。ニシナム族の力は、その一番強い戦士の力ではない。ニシナム族を強くするのは、ニシナム族すべてを寄せあわせた力なのだ。おまえとわし、戦頭と最初の人間が話しあうのは、互いに優しい間柄だからだし、そうしてわしらは知恵を出しあい、そしてニシナム族全体は話しあったから、いっそう強くなったのだ。

(声が聞こえ、誰かが歌っている。レッド・クラウドは、静かにするよう手を上げる。)

連れあいとなる歌

露の女

朝、川のそばで、
 晩に、火のそばで、
 夜、みんなが横になって眠っているときに、
 私は生の欲求に引き裂かれた。
 私の心臓の鼓動のもとで
 私に生じた夢の揺れ動きがあった；
 私の耳もとには、今は生まれてはいない子どもたちの
 ささやかな声でした。

レッド・クラウド

(レッド・クラウドが歌うと、露の女は木の後ろから忍び歩いて彼に近づいてくる。)

朝に川のそばで

わしは初めてわが露の娘に会った、
露と夜明けの光の、
夜明けと甘い汁の娘だった。
彼女は笑いだったし、日光だった、
女であり、娘であり、仲間であり、妻だった；
彼女はきらめきだったし、喜びだった、
まったく生命の歌だった。

露の女

夜に私は火を熾^{おこ}した、
処女が世話をする火だ
女盛りに
それぞれが男たちのなかの自分の男のために熾^{おこ}す火だ。

レッド・クラウド

夜にわしは彼女を求め、女であることを知り、
彼女の安らぎと、満足と、安心を見つけた、
苦勞と戦いの1日のあとの
女の胸で男のほうびだ。

露の女

私のところへ夫であり恋人がやって来た；
優しく両手を私に置いた；
男らしくそっと私に言い寄った、
種族の父親となるべき人が。

レッド・ウッド

彼女の両腕がそっとわしの体にまといついた、
ニシナム族の1番めの男に、
露や夜明けと同じぐらい柔らかい両腕の
ニシナム族の娘が。

レッド・クラウド

彼女は生命であり女だった！

露の女

彼は生命であり男だった！

レッド・クラウドと露の女

（互いの体に腕をまわして。）

2人の愛の夜のうす暗がりの中で、
結婚の火のかたわらで、
2人は生きる喜びのすべてを確かめた、
2人の願いの腕の中で。

戦 頭

（怒って。）

男たちの寄りあいの場は、女たちにはふさわしくない。

レッド・クラウド

（穏やかに。）

男たちが優しく分別があるようになれば、男たちの寄りあいに女も入ってくるようになるだろう。男たちが成長するにつれ、女たちも男たちの母親になり続けたければ、男たちとともに成長しなければ。

戦 頭

太陽の寄りあいには女たちがいる、と昔から言われている。ということは、太陽の男がわしらをやっつけるということではないのか？

レッド・クラウド

それでは太陽の男のほうが強いということだ；たぶん太陽の男の優しさと分別と、女たちがいるからだろう。

若き戦士

ということは、太陽の女たちが見た目に良く、腕になめらかで、男の心に火をつけるということか？

まじない師

（しやつめらしく手を上げて。）

若者が忘れないように、例の話をくり返し言うてやるのがいいだろう。

戦 頭

（うなずきながら追認して。）

さあ、話の始まりだ。

（泉を指さしながら。）

ここで、空へと上がってゆく太陽の男に踏みにじられた所から水がはじけ出たんだ。
(戦頭は先頭に立って丘の斜面を泉まで登っていき、老人に話を始めるように合図をする。)

太陽の誘惑

老人

世界がまだできつつあった頃、
このでっかい森の中で、
毎朝太陽の男が出てきた。
太陽の男は白く輝いていた、
その目は空色のように青かった、
その髪は乾いた草のようにあでやかで、
その目は太陽のように暖かく、
そのまなざしには果物と花があった；
彼が目をやるすべてのものが生長し芽ばえた、
わしらがあたりに目にする木々が、
森じゅうで一番でっかいのは、
太陽の男が眺めたからだ。
そのまなざしが注がれた所には草が種を落とし、
その足が下りた所には突然トチノキやハシバミ、
ベリーの低木やウラシマツツジの茂みが現われ、
ついにはその細道は地味の肥えた耕作地となり、
川のように彼のあとを流れ、
つぼみや花へとほほえむのだ。

霜も飢饉もまるでなく、
そうしてニシナム族は幸せだった、
四季を通して歌ったり、踊ったりしたし、
寒い時も飢える時もまるでなかった、
太陽の男がわしらに混じって暮らしていた時は。

だが、意地の悪い抜け目のないキツネどもが、
ニシナムとすべての男たちを嫌って、
この森の中に罾わなを仕かけ、
朝になると太陽の男を捕まえて、
罾の綱を使って捕まえ、
その知恵を盗むために彼を縛り
自ら明るい太陽の男たちになろうとした、

まなごしが暖かで足が豊作をもたらす、
霜と飢饉の支配者になるべく。

即座にコヨーテが駆けつけ
倒れた太陽の男を助けにきた、
即座にずる賢いキツネどもを殺し、
即座に隼の綱を切り、
即座にコヨーテが太陽の男を解放した。

けれども太陽の男は怒って、
稲妻のごとく突っ走って、雷を投げつけ、
霜を解き放ち飢饉に迎え水をやり、
低木にとげをつけ、ベリーをはさみ取り、
とちの木の実には苦味を入れ、
山々を頂上まで揺るがし、
丘を溪谷に放りこみ、
潮を減らして川を浅くし、
塩水の海に淡水を注ぎ、
この森で足を踏み鳴らすと、
かかとの下から水がはじけ出て
永久に世界に腹を立てながら
太陽の男は天へと上がっていった。

まじない師

(しかつめらしく。)

わしはまじない師だ。前にどんなことがあり、今度は何が起こるかわかっている。死の道を通りぬけてきて、死者とも話した。わしの目は、見えないものも見てきた。わしの耳は、口にされない言葉も聞いてきた。そこで、これから先の太陽の男のことを聞かせよう。

(まじない師は突然、見るも恐ろしい顔のゆがみと斜視の目玉とゆるんだあごをして、身をこわばらせる。両腕を振りまわし、のたうち回り、苦悩のうちに身をよじらせ、まるで引きつけを起こしたかのようである。)

(女たちは突然、泣き叫ぶような、はっきりしない歌を歌いだし、体を調子に合わせて揺り動かす。男たちは、何となくいやいやながら彼女たちに加わるが、くやしさを見せるレッド・クラウドと残念なところを見せる戦頭だけは別である。)

(まじない師は、^{けいれん}痙攣性の震えとおののきを有して高まる熱狂を先導しながら、皮膚をまとうものをはぎ取ってしまう。すると^{もも}腿のあたりに着けた鷲のかぎ爪の腰帯のほかは、すっかり裸になっている。その長い黒髪は、顔のあたりになびく。驚くほど唐突に、彼は動きを止め、まっすぐにこわばって立つ。すると低いうめき声で迎えられるが、それもゆっくりと静まる。)

予言の歌

まじない師

太陽は決して冷たくなることはない。
太陽の男は太陽に似ている。
その怒りは決して冷めることはない。
太陽の男はもどって来るだろう。
太陽の男は太陽から帰ってくるだろう。

人々

太陽の男はもどって来るだろう。
太陽の男は太陽から帰って来るだろう。

まじない師

前ぶれがある。
彼が空に上がっていった時に水が吹き出したように、
彼が空からもどる時には水が流れるのをやめるだろう。
太陽の男は力強い。
その目には青い火がある。
その両手には雷を持っている。
その髪には稲妻がある。

人々

その両手には雷を持っている。
その髪には稲妻がある。

まじない師

前ぶれがある。
太陽の男は白い。
その皮膚は日光のように白い。
その髪は日光のように輝いている。
その目は空のように青い。

人々

前ぶれがある。
太陽の男は白い。

まじない師

太陽の男は力強い。
 彼はニシナム族の敵だ。
 ニシナム族を滅ぼすだろう。

人々

彼はニシナム族の敵だ。
 ニシナム族を滅ぼすだろう。

まじない師

前ぶれがある。
 太陽の男は、その手に雷を持つだろう。

人々

前ぶれがある。
 太陽の男は、その手に雷を持つだろう。

まじない師

太陽の男がやって来る日には
 泉から出る水はもはや流れないだろう。
 そしてその日には、彼はニシナム族を滅ぼすだろう。
 雷とともにニシナム族を滅ぼすだろう。
 ニシナム族は去年の草のようになるだろう。
 ニシナム族は去年の野営の焚き火の煙のようになるだろう。
 ニシナム族は眠れる人を困らす夢以下になるだろう。ニシナム族は誰も覚えていない日々のようになるだろう。
 わしはまじない師だ。
 申したぞ。
 (人々は悲しい泣き声をあげる。)

戦頭

(握りこぶしを胸を叩きながら。) ホー！ ホー！ ホー！
 (人々は泣くのをやめ、戦頭のほうを期待をもって見る。)

戦頭

わしは戦頭だ。戦ではわしが命令する。戦でわしが命令するときは、まじない師もレッド・クラウドもわしに否とは言わせない。太陽の男にもどってこさせてみろ。わしはこわくない。もしキツネたちがロープで彼を捕まえたら、そしたらわしは槍とこん棒を使ってやつを殺さ

せるさ。わしは戦頭だ。戦ではわしが命令するのだ。

(人々は、戦頭の宣言を好戦的な賛成の叫びで迎える。)

レッド・クラウド

キツネたちはずる賢い。太陽の男を腕のロープで捕まえたら、抜け目なく彼を優しさのロープで捕まえよう。優しさの点では、オー、戦頭は、力となるもの、大いなる頼りだ。

まじない師

レッド・クラウドの言う通りだ。優しさには力がある。

戦 頭

わしは戦頭だ。

まじない師

おまえに太陽の男は殺せない。

戦 頭

わしは戦頭だ。

まじない師

太陽の男は雷を片手に戦う。

戦 頭

わしは戦頭だ。

レッド・クラウド

(彼が話しだすと、人々は目に見えてその論法に負けてしまう。)

その通りだ、おー戦頭。戦ではあんたが命令を出す。強い、一番強いからだ。あんたはモドック族をやっつけた。ナパ族もやっつけた、1人残らずな。大きな川のクラム・イーターズ族もやっつけた。それでも、キツネたちのすべてはやっつけていない。キツネたちは戦えないが、それでもあんたよりも強い。あんたがキツネたちをやっつけられないからだ。キツネはキツネだが、わしらは人間だ。太陽の男が来ると、わしらはキツネのようにずる賢くはなれないだろう。わしらは優しくなるだろう。優しさと愛をわしらは太陽の男にやるのさ、そうすれば彼もわしらの友だちになるだろう。そしたら彼は霜を溶かし、飢饉の歯を抜き、わしらの深い水の川やわしらの甘い水の湖を返し、とちの木の实から苦味を取り、いろんな点で世界を、彼がわしらのもとを去る前の良き世界にしてくれるだろう。

人々

万歳，レッド・クラウド，最初の人間！
万歳，レッド・クラウド，どんぐりを植えた人！
彼こそは世界でわたらの食べ物のある方を教えてくれた！
彼こそは世界でわたらが歩むべき道を教えてくれた！
彼こそは世界でわたらの心の有りようを教えてくれた！
彼こそは家族の習わしを教えてくれた，
部族の掟を，
トーテムの掟を，
そしてわたらを人間のなかでも世界の強者にしてくれた！

（人々が歌っているあいだ，丘の斜面が暗くなる。）

<——次号に続く——>

※本学の教育のために多大な貢献をされた辻井榮滋名誉教授は，2019年2月27日にご逝去されました。この日は本学に出校の予定で，その際本稿の修正済みの校正稿を提出すると通告されていました。ご逝去後，鞆の中から提出予定とみられる校正稿が発見されましたので，それに基づいて校正を行なったものです。文末に「次号に続く」とありますのは，原稿の通りに印刷したのですが，もはやこの言葉が果たされることがなくなったことを痛恨に思います。謹んでご哀悼の意を表します。

経済学会委員長 松尾匡